

古今和歌集心義

卷三四
由

和書門			
二八〇	八九	類	
六	函	號	
一八	冊	架	

內閣文庫		和書	
二〇〇	函	二八〇	九
六	冊	架	號

內閣文庫	
番號	和 28089
冊數	18 (14)
函號	200 31



古今和歌集心裁卷第三

巻第三

春の日の夕まはるきあけのへし物も

あけのへし物もあけのへし物もあけのへし物も

春の日の夕まはるきあけのへし物も

あけのへし物もあけのへし物もあけのへし物も

あけのへし物もあけのへし物もあけのへし物も

あけのへし物もあけのへし物もあけのへし物も

あけのへし物もあけのへし物もあけのへし物も

集字も不運悪くも也此詞書りて不運字あり
リ又物珍ハ時をよむついでも三々ありて類白
ありと云ふ事ありかきと成ぬもあつくりやふを
成をわくハ又日ふちをいふすも也あつて
とくし又時をいふ事ありと云ふ事ありて平
竟すも必ず登ふ事ありと云ふ事ありて月を海を
燈をふち物と成もいふ事ありて海をすまうやく
只ふちと云ふ事ありと云ふ事ありて枕を打ぶの事
形ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
かきと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

かきと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
當時乃常也

業平御上の歌よけきる女のもくにけり
つとむと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
いさくれあふははる流川神をいさくれ
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
勢作より業平をいさくれと云ふ事あり
敏行ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
よわていさくれと云ふ事ありと云ふ事あり

業平のやうなるあしをくまのやうなるものもあつて
くまのやうなるものもあつてはなすを流河と
うをゆく神をぬきて流河と云ふと云ふは長篇
の水まゝの川に事おまはる川と云ふのまゝの句
は川の縁に是を流はかり行く邊に
しと解る調ように云ふはしと云ふは
と云ふは事也と云ふは神ひりてあつて
魚もさる魚もさる山もさる山と有るやう
世語の所ぬ行集等えひりて也つてさるはつて
くまの思ひの事と云ふはさる時ハ少静か

その物さるものさるはさるしと云ふは時を
はす事とも云ふは俗に云ふさるさるの時也
いづくも同意な事と云ふは語のまゝ表す物思
ふやうのさるはさるいづくもさるさる
云ふはさるさる

ふかやまのさるさる

あまのさるさる

あまの神ひりては流河の身と云ふはさるのま
はさる流河の流河と云ふは神ひりては身のみ
もさるさると云ふはさるさるのま

浅之江乃言云々乃不志道ハ山々云々乃常旬
さう通じても也今一六紀氏抄ノ里ノ物ニノリ
可ク源語ノ浅ニシテ人ハかりたらぬものなり合
俗ニモ深ニ浅ニシテ他ニ云々也ヤ一其ノ事
神ハヒキキハ云々ハ潤ク物ニナリ也

是志云々

よき人志云々

よ如魚云々身云々云々陽云々云々
心云々云々云々云々身云々社云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々

心云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々

後ノ行ノ事云々物云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々

御しき也いまふのなしくも度をもえたるをあらは也
そそ世見すく申す先々くのさ人とていふも
うまひ似く用言歎かきと一ツの物駢よきくたんと
い見すく申すささ入るいれをいふとやのえを
余ふとらりむき也

あそむるふる白雪といふも我々もいふもさあを
此説をあらはにいふく梓舟人なるも也

君よりそむる今降ゆさのゆくあつらふも我々
其ふも昔より海なる魚も物をもえりといふも
との建も也物をもえの表は日よ六十日をちりていふ

とらるといふも余韻を云はる語也

○遠後ノモノヲサテモ達又事カナとてさあは
さす世さへは信ふ我々も嫌し我々もあらはのこ
乃場よさすかき所よいといふ今古はさす也俗よ
つる所は只我々もいふにり早急同急といふ
とらるといふも

奇りもいふ

秋の野ふさくわきあき方神もいふもさあはるは
秋の野ふさく維分る朝の神も我々もいふも
よあきく獨疾くはるす夜の吾神といふも

かゝる秋の野とては海とては朝とてはふも露
深き隈をさへてゆく四句の帖又舞後のつらさを夜
のつらさをいふに似たるは海方の野とてはなほ
る夜とかきたれきたる神を引合たるをそとせ
ぬをさへて夜は心をえつるをそとせぬをさへて
ぬの心をさへてそとせぬをそとせぬをさへて
かゝるをさへて調もわづらふよめは見えぬをさへて

小野山守

こゝろを我身をさへてさへてさへてさへてさへて
さへてさへて見苦しむ我身をさへてさへてさへてさへて

足のだるさをさへてさへてさへてさへてさへて
さへてさへて物をもさへてさへてさへてさへてさへて
さへてさへてさへてさへてさへてさへてさへてさへて
さへてさへてさへてさへてさへてさへてさへてさへて
さへてさへてさへてさへてさへてさへてさへてさへて
さへてさへてさへてさへてさへてさへてさへてさへて
さへてさへてさへてさへてさへてさへてさへてさへて
さへてさへてさへてさへてさへてさへてさへてさへて
さへてさへてさへてさへてさへてさへてさへてさへて
さへてさへてさへてさへてさへてさへてさへてさへて

ふつふつ浦の縁をよせてよとあはせ也古強のさほ
を身づく情る事

○遠鏡の初二句の名を此強の詞よすれもの也
とて六世也先書けくの強を打之すお流る
中其所よと書るのひえはてて詞を打之てえさる
すううを強をいけ強をいよる詞よすかや
此を得ますすや也此強の解の名をんよ見
あふ浦と我身を志すのやと云あつて事
あく中くあつてまらるは世や何を嬲り
打之て人の心強をいせえ又とてあふ身を

打削ふるややくもよ強かすや一強の外
す削ゆりいもあはるあ見もあはるよ
あふふうたはるあ人違ひく強をい
同き強もあつて又強は我身乃うとよ
強多あはれ強の強よ強の也とて一
たはあけし強もあはるあ強の強
うや限るあはるあ強の強
まは我を強あはるあ強の強
算と伊勢乃強也とてあ強の強
る事強もあはるあ強の強

世を同くせし世同時の人も訪をうりて
よき物あしんや又世人の事なりたる訪の事
多きをてちやふく我身の事とて出ても
さしや又昔より傳つて我れうりて形を
やあし人の事とてふ事と有き由所の訪
よれりともさしや昔より寛平五年の物
よ人きし事いふ事とて訪もまくと入る
悲しくも訪よりて訪とて訪とて訪と
りたる事

源宗于御

世を同くせし世同時の人も訪をうりて
よき物あしんや又世人の事なりたる訪の事
多きをてちやふく我身の事とて出ても
さしや又昔より傳つて我れうりて形を
やあし人の事とてふ事と有き由所の訪
よれりともさしや昔より寛平五年の物
よ人きし事いふ事とて訪もまくと入る
悲しくも訪よりて訪とて訪とて訪と
りたる事

世を同くせし世同時の人も訪をうりて
よき物あしんや又世人の事なりたる訪の事
多きをてちやふく我身の事とて出ても
さしや又昔より傳つて我れうりて形を
やあし人の事とてふ事と有き由所の訪
よれりともさしや昔より寛平五年の物
よ人きし事いふ事とて訪もまくと入る
悲しくも訪よりて訪とて訪とて訪と
りたる事

世を同くせし世同時の人も訪をうりて
よき物あしんや又世人の事なりたる訪の事
多きをてちやふく我身の事とて出ても
さしや又昔より傳つて我れうりて形を
やあし人の事とてふ事と有き由所の訪
よれりともさしや昔より寛平五年の物
よ人きし事いふ事とて訪もまくと入る
悲しくも訪よりて訪とて訪とて訪と
りたる事

かゝるや用をある也

○遠後ノ云テ見ヤシナラ浪ハ風カ吹ニヨツテメツ
モ、チヤと解クハ語個々ニテ了ラタシクテソレ
と後ノ事ナリトテテテテテテテテテテテテテテテ
也信定ニシテ既ニ此ノ一例を以テテテテテテテ
同ニ格ノ思ヘクヤ

テテテテテ

陸奥ノ事トシテ名取川ノ事トシテハテテテテテ
トハ序也トシテ名取川ノ事トシテハテテテテテ
今ハ識ある名取川ノ事トシテハテテテテテ

テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ

○遠後ノ事ヲ云テテテテテテテテテテテテテテテ
ワクナコトナヤワイトシテハテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
名取川ノ事トシテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ

テテテテテ

テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ

見く誰も知く... 遠鏡... 毎夜... 二千ヨツトナリ...

○遠鏡よりトウソノ毎夜ニ二千ヨツトナリ...

と其申さく... 用... 津海... 遠鏡... 二千ヨツト...

遠鏡... 月カ出テヨウ見エ...

○遠鏡より月カ出テヨウ見エ...

シルと解る物にしていふ事にして其の事なきや
讀人共々す

さびくそ替りさよひそ違ひの夕つをさるゝあすもあは
年月あひさしくまはし今宵そ違ひまは
あくもとあひさしくまはし今宵そ違ひまは
アノ筆でぬんをを感也すれさるゝ相をさ
又あひさしくまはし今宵そ違ひまは
りさるゝあひさしくまはし今宵そ違ひまは
さるゝあひさしくまはし今宵そ違ひまは
あひさしくまはし今宵そ違ひまは
あひさしくまはし今宵そ違ひまは

よも同じ後獲り獨りす時をさるゝあすもあは
はまし遠く大相かりさるゝあひさしくまはし
獨りす時をさるゝあひさしくまはし今宵そ違ひまは
あまのあひさしくまはし今宵そ違ひまは
の初らよあひさしくまはし今宵そ違ひまは
あひさしくまはし今宵そ違ひまは
あひさしくまはし今宵そ違ひまは
あひさしくまはし今宵そ違ひまは
あひさしくまはし今宵そ違ひまは
あひさしくまはし今宵そ違ひまは
あひさしくまはし今宵そ違ひまは

恆名んあるる所あま不述す又中ふ身八回詠書
さうしかりし時四回よと参りて船の舟を之に
何よりとをもおくしとの故道の時とをいふは澄と
志うしとをいふ梅さうふ書記は衆常世長鳴鳥
使に長鳴といふ古事記は集常世長鳴鳥今
鳴而といふをいふて神社の八方此ををを
半伊勢の神宮より志て志うしとをいふ時有て木
節を有る半も有るんは神馬あふふ本節を有
るはとをいふて置物等とを志る物するか常
形も六とをいふて船もかかふ半也とをいふ志

志うしとをいふ

志うしとをいふ

秋の夜も名の成をまめしとてと我もわく明を物を
志うしと云秋のよも名の也達と云は形も六
く秋のよもあつて明をまめしと云は形も六
とをいふと云ふふ明をわくしと云は秋の長と云
夜をと云ふ同一と我もわくは此半と云ふ
あふふと云ふと云ふと何のと云ふと云ふ
と云ふは形も六と云ふ語も六今秋のよも
けし明をいふと云ふと云ふのよもと云ふ

よきことなればこそとていふは
まことにいふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ

何何何何

よきことなればこそとていふは
まことにいふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ

なごの今この漢字物は
かゝるものなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ
とていふべきことなればこそ

夢現のさるひをさるるに不準す外の世をやり
しるよと也是を非後より達し一問のよむおよ
より夢現のおわすすといふ今宵の夜をよむ
世にく定ちよと云ふ作りさるる

題云く次

讀人一一す

ぬを思ふまのうつらたのさるる夢よいともほむはり
闇のまぢまの思ひ達しハ世ある夜さるの夢より
何とわくも増く作りさるる也達ありて類も形も
見たりし事れあるす移りて今宵の思ひ余
りて候しるかある夢よ今宵て中詠おそしる也

よまくと天乃と云る月形ははるも君をあらえつる形
遠後より向れ亦乃の詠の上句をりし序を
と云る世より記さるる六句えさるる也亦形は是引の由
下と云る月形はあはるる入る達えいり哉是も亦
之より同詠也あはるる照しるる月丸をの顔きたる
きり記える心ち志くやうに云ふかたねの油の
あふたし是も後列にあると云る石残を思ひ
いけしと云ふ二首等類也

是の君もつらもすしと誰かあるさるる思ひはるる
細引もよむ古院好かたはれ作者の念けり新

毛通しを云々... 推もく... 也... 鴨...
鴨... の類... 常... の物... 氷部...
乃... 氷... 氷... 氷... 氷...
氷... 氷... 氷... 氷... 氷...
氷... 氷... 氷... 氷... 氷...
氷... 氷... 氷... 氷... 氷...
氷... 氷... 氷... 氷... 氷...
氷... 氷... 氷... 氷... 氷...
氷... 氷... 氷... 氷... 氷...
氷... 氷... 氷... 氷... 氷...

命... 雪霜... 霜... 霜... 霜...
霜... 霜... 霜... 霜... 霜...
霜... 霜... 霜... 霜... 霜...
霜... 霜... 霜... 霜... 霜...
霜... 霜... 霜... 霜... 霜...
霜... 霜... 霜... 霜... 霜...
霜... 霜... 霜... 霜... 霜...
霜... 霜... 霜... 霜... 霜...
霜... 霜... 霜... 霜... 霜...
霜... 霜... 霜... 霜... 霜...

讀入志

言... 言... 言... 言... 言...
言... 言... 言... 言... 言...
言... 言... 言... 言... 言...
言... 言... 言... 言... 言...
言... 言... 言... 言... 言...
言... 言... 言... 言... 言...
言... 言... 言... 言... 言...
言... 言... 言... 言... 言...
言... 言... 言... 言... 言...
言... 言... 言... 言... 言...

海に布れよと云わたりたりと云ふを相名
少くもく養へく相名なり續後格遣り同人
根も志也れどもまゝあるは社に彼のよき
も人今都たりよと書向ふことひるまゝ
當初の志なりと云へば思ふ今も云ふは

平貞文

白河乃志しんていんていんていんていんていん
人のふまゝのまゝ知れしとてかくり果てたる
まはあつていんていんていんていんていん
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

六見まゝのまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
十年の回りのまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

○金我の志すまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
まゝも遠鏡をいふなりまゝまゝまゝまゝ
有るまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

乱まきん何事と人おとるんそと也平しるそとの語ハ
當初の手語也とよま〜〜〜十分〜
云々〜
草目手玉結之絶而別者為便可無生結肅念者
苦玉結の絶天乱名知者知友今は是子似〜
我恋を思ひ〜
強の定ぬ〜
語言繼而相事毛将有回十足引乃山橋之色
出而吾恋南雄八目難為名ふ〜
を〜

彼万葉ハ熱僧也る〜
物〜
又〜
ぬ〜
時代〜
る〜
山乃足〜
の後〜
十分〜
是の〜

其外をいふ事より考
るに其初枕とつひに一時は彼文の勢
定むれば只是東山瑠磨との云つらん云ふは後
調をいふにふましく之を自然に入事して是也
之璋之とある故して之は輕く河ふまは也然ん乃
心許し人ふふの之も無の同く自然に遊全
入るものも弱草之毒毛橋とかきさる少之之
のふまはにあらむやの草の橋ふらうあり古
者以弱草喻夫婦ふと云後の説もあまなりより母
仁賢の所巻も弱草昔文何かなと有り之の

文字ありて是と古事記須辨理昆賣命れ所強
ふと和加久佐能都麻世とあり其之の字入るよ
うも古しと云はれは是く記記の勢と心當初のお
遊ももまけまは論定とあり別よりあり

よ

ちやん我もいかにさき出ぬよ然らば
余れふ穢かたれける舟のやうふ思ひをねを中く
人をいふものさくあふは後より仲をいふこと
出る舟の如く我をいふ公界ふあつてあつて人
をいふをいふことかたしと云ふる所あり

平にさし置かれし事、其の如く云ふるや、
を徳の定む事、此の如く、月如く、
父の如く、其の如く、七八、
此の如く、云ふ事、今云ふ事、七八、
す其の如く、乃を云ふ事也

平 貞文

枕よきまゝ、志人の如く、志を流す、
志を流す、志人の如く、志を流す、
志を流す、志人の如く、志を流す、
志を流す、志人の如く、志を流す、
志を流す、志人の如く、志を流す、

枕よきまゝ、志人の如く、志を流す、
志を流す、志人の如く、志を流す、
志を流す、志人の如く、志を流す、
志を流す、志人の如く、志を流す、
志を流す、志人の如く、志を流す、

風を流す、志人の如く、志を流す、
志を流す、志人の如く、志を流す、
志を流す、志人の如く、志を流す、
志を流す、志人の如く、志を流す、
志を流す、志人の如く、志を流す、

後橋の書と云ふは、こゝろよあめをうらむるに
源氏枕草の申すは、いふまゝにうらむるに
少きふいふ申すは、いふまゝに枕草紙の所
か申すは、いふまゝに申すは、いふまゝに
むのくうらむる

予よ我が病をなす事野の山をたふさるる
あはれなり強よを思ふるに、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり

あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり

伊勢

あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり
あはれなり、あはれなり、あはれなり、あはれなり

あふくろふさきつらき歌よみあつて歌きやうし
也志らんとて置けたるは獨あるよりぬきをさる知
る一塵はとも枕のぬあをを縁よよせしむ
たらの言歌あやうかくさまやうあまの伊勢の歌也
巧く已上二首あつたれは歌院上人よき歌也

あふくろふさきつらき歌よみあつて歌きやうし
也志らんとて置けたるは獨あるよりぬきをさる知
る一塵はとも枕のぬあをを縁よよせしむ
たらの言歌あやうかくさまやうあまの伊勢の歌也
巧く已上二首あつたれは歌院上人よき歌也

古今和歌集正義卷第十四

惠歌四

題志し

よみ入

陸奥のあふくろふさきつらき歌よみあつて歌きやうし
上六序也ろふさきつらき歌よみあつて歌きやうし
わとけく道ともねぶらうもいれさあまの永を
たたりて身をやまふんとあつたれは歌院上人よき歌也
長明東路の記藤原の所よ南よの池乃おもく
遠くあふくろふさきつらき歌よみあつて歌きやうし
よみ入

あまの平れたるいふらん半ちやうきくはるる歩開り
初成云二河養廉の玉くうのしよるよるよりのり
水草より菰の類也と云り其根をとりて晒し粉
もろくは籠り作り又切交ふも志く合ふ也其
物よりあの手よりあの手かきれしは誠しに
大方蕎麥の餅も味ひたる物也と云り略解ふ
毛陸奥の今菰菰の餅く菰の皮をさる
あまのしよるいふらん別ちりの玉よるあまの
法くはきふらん一はく草あるは菓と云る
其死ふらんも毛をさるすきりのよは之加を

乃名也蓮花為菰菰ふと皆死をすはは
し見らんたるもの也死橋もたたる其果をうつ也
はを酸醬酒等の種類よりはくはす其果と
見らんあまのふき也

○遠藤のカツとニチヨトカツ逢夕斗ノ人ヲ云
る也也見らん云より只今も事と思へるあり
大り信明集死つらなる人の心入あるは昭
とあそ遊した校名は死つらなる心なるたも
有りのを浅くは派。水や絶せん此強ふは強

魚公也

夢にた不見の六三三 一 見なく我が身新なる身は
今もた不見のままも 一 見えなくやまなく相も
後の新の毛おとせし身は 一 見えなく也よる也
と相見ると申す方の見えは 一 夢の見る也其
まじりあつてまじりて 一 新をこく我身を人へ 一 恥る
ふしと今もた不見と 一 其我新を向ふ人へ 一 面新
え入る恥る身と 一 ちゆらに云ふやまら 一 ちゆら
也よる 一 後の新へ 一 恥る 一 ちゆら 一 云ふ 一 ちゆら
ますとちゆら 一 用ひて 一 ちゆら 一 後と 一 ちゆら 一 ちゆら
ち吾面新と云り 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら

いふ新の毛は 一 見えなく 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら
新なる毛は 一 見えなく 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら
ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら
ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら
ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら
ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら
ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら
ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら
ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら
ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら

ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら

右まの水の毛は 一 見えなく 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら
初二の毛は 一 見えなく 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら 一 ちゆら

さそ相をいし別をさすも有るなる余りや
そそいふ事ありし中一領也

○中聴よりまよふ事ありしは古語也
とまよふ人九集の志をよみしは
とつまなく行水を深きをみししと我白くしてあり
ある天啓ありしは強くもゆきしはさうもさうも云
る事ありしは直にさうも

そそあまの別ありしはさうもさうも入るる事ありしは
是の事ありしはさうもさうもさうもさうもさうもさうも
たり是の事ありしはさうもさうもさうもさうもさうも

そそ見ふ事ありしはさうもさうもさうもさうもさうも
万葉十一の伊勢乃白水亭之朝奥夕葉雨潜云
見之獨念荷指天とすもさうもさうもさうもさうも
遠鏡ふも朝食の事夕食の事也奥類をもあや
云事と同意也此語をもさうも朝の事とさうもさうも
中絶ともさうもさうもさうもさうもさうもさうも
例ありしはさうもさうもさうもさうもさうもさうも
さうもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
事をさすもさうもさうもさうもさうもさうもさうも
也やそとさうも朝ふくさうもさうもさうもさうも

さる半のりもあや味を有るすといふ事なる
もの也といふに其手に遠慮の言是れ唯しを
かたよふかたよふ身をせしむるやと云ふ身をや
はしむるはふと云ふ事なりと皆口調はすかたよ
らる也

凡河内之り

かまをすん後をいふて夏草はあつても人のあつても
あつて枯んはあつて後をいふてつをかりはあつても人
の思ふ事と云ふなりと云ふなりと云ふなり也深あつて
そりて枯んはあつていふてなり夏草は深あつて枕

と枯をすんの向も毛縁あり也志はすりて
夏草はあつてのりはあつていふていふていふて
秋は後必あつていふていふていふていふて
あつていふていふていふていふていふて
よりあつていふていふていふていふて
はあつていふていふていふていふて
もよるかたよひく論はあつていふていふて
あつていふていふていふていふて

よる人志

あつていふていふていふていふていふて

と金枝の今れ之帖を見らまふもの玉姫と有と云り
さへ此帖よまきて後人方加へしあるべしと云より
難き物也動くろハ杖席してさへ今ハ云々
此巻をよみしと云ふべし考ふるに此の坐代も
何れと云ふべしと云ふべし故に今奥の回
核の向ふと云回も向ハ倍字と云まれば略也寛容
来と云坐敷の代と云ありすまて今壁代も
同一と云ふ其巻を定助の布ニキの山毛じき也
思ふに我知せんといふまじは榎の核もさへ此巻に
此真木の戸ハ圍の戸もあへりこの戸あましくおろ也

素性法師

今とんとていへるも長月の有ぬの月を待たるる所
こ上二首云ぬき

よき人志す

月夜よよしと人よ昔をいふと云ふは似たりは
今宵ハ月夜也よき夜也人の許へ云やハや
来まよと云ふ似たり又我も待たるハ云ふ
よかしく願ふ也今よ月夜ハと云月夜ハ
よき吉然云りといふも万葉羅ハ月夜吉何音清
之率此向行毛不去毛遊而將歸其外月夜ハ

語をけきてたてをる石所の今来の困ふとよかきそ
之は今来の困と思て毛と云時今来の困ふ
困ゆるよ今来れすふと云えぬ也語細の意に
きつ半ハたつに三つす

思ふすハ社やといしに衆我々やゆひに衆ハあつても
之れをけし一末句ハ万葉子居明而君子者將侍
奴等珠乃吾黒髪爾霜者零騰欠す同十下侍
不得而内者不入白細布之吾神雨露者置奴靴す
同十下侍君常庭再居者亦麻衣吾黒髪爾霜曾
置爾家類ふとの類もと只衆たたくも侍更す

乞也すく母さすま下葉十下肥人額髪結在深木
錦襟心我忘哉とわを合也思ふととゆひふゆ色
のかつハたすす今用とやん不つけるまあ
思ふくはまうくハたつておつてあて云て死
をわたりををうけきんよハ君侍夜ハいハ死
たつてハ其のつれま思ひをかきふ足まり強
乃すかろけけけハ女ふくく見ゆきふうろ毛
解さハもの也男あハ只世世れ組結ふくまあ
云る事あつてハハ前後を用ゆ

高きものをあつてハハ秋高をわく風を侍と云を社す

事ありハ本をもちてありていひまゝにせよと云りたる
事ありて一後にもあつたれども是より上りて
此れの外は類ひなき一編一語一山一草
も對するべきはなしとていひまゝに
すくひを以てしよと云す調よつて
と云ふことありて一

ある事一今も見えて山ありて
あま山にありていひて女子ありて思ふ
る一今も山ありていひて今も思ふ
た見えていひて思ふ一今も思ふ

の語勢をいひて思ふことありて
故にそのありて思ふことありて
見えていひて思ふことありて
ふあやまり昔も今も思ふことありて
まも思ふことありて思ふことありて
もいひて思ふことありて思ふことありて
見如毒徳爾鹿將鳴山曾高野原之宇倍ふ者
毛康の思ふことありて思ふことありて
今も思ふことありて思ふことありて
ふ也諸君の思ふことありて思ふことありて

也。解の諸詞をさす事也。

清の由を思ふ山をさす事也。清の由を思ふ事也。其
常く事さす事也。其常く事さす事也。其
外は何の思ふ事也。

貫之

動の由を思ふ事也。其常く事さす事也。其
中、亦也。此をさす事也。又、達下也。此
と別達下也。後思ひ移る也。移る方の正西の比
をさす事也。其常く事さす事也。其
事、亦也。此をさす事也。其常く事さす事也。其

上、解を欲す事也。此をさす事也。其常く事さす事也。其
事、亦也。此をさす事也。其常く事さす事也。其
事、亦也。此をさす事也。其常く事さす事也。其
事、亦也。此をさす事也。其常く事さす事也。其
事、亦也。此をさす事也。其常く事さす事也。其
事、亦也。此をさす事也。其常く事さす事也。其

物

事、亦也。此をさす事也。其常く事さす事也。其
事、亦也。此をさす事也。其常く事さす事也。其
事、亦也。此をさす事也。其常く事さす事也。其
事、亦也。此をさす事也。其常く事さす事也。其
事、亦也。此をさす事也。其常く事さす事也。其
事、亦也。此をさす事也。其常く事さす事也。其

きんもよまふ云々の死もさしてあて有るは也早業
あしくともていふゆるちり切あるよりあまの
梨ふるの物もなき名つけんとの葉そと直せり
類ひの年れ子重む也さへくる年ねまいつら有て
もつる章りて只一節の力をほすの何をもささる
手にあす能はれ葉もたちねや云やうやう
やのみまふると同之也かゝるの字章ある年一葉
よまふ万葉了海庭奥津白浪立田山何時鹿
越奈武林之當見武ふとありまふと世勢の證とて
よまふ人志す

三よまふ打也河野の若ふとあふよ思ふもつらふらふ
ちりをすふもち若野河を云ふとて類ひあふと流あれ
たも河川と云何と云ふ同く當時さる物もりにあふ
三者一換へて万葉二今敷者見目屋跡念之三若野
之右川余柿乎今日見鶴鴨す同乎和可由都
流麻都良能可波能可波奈美能奈美通之世波婆
和礼故飛米夜母す同す山代泉小菅帆浪妹
心吾不念

かくあひん物とハ我^の思^ひをたのむるをす所から
三帖のハ^の思^ひをたのむる物と云ふとあり考へる

中歌を待たるるおねと云々
よき人の言ふもいさうたうらうぬ中歌強を云んと
く健く唱響を限り雷鳴を引出せり也万葉十一
は朝風雨井提越浪之世蝶似裳不相鬼故儼毛響
勤ニす富支の高根之鳴澤のこ葉中名之部
よもはつたふらふらるる奉りてけいんくは皆音の
此物を云りよふを今もゆきとらうしよきとらるる
よき也さうたうらうぬ女うく云すもこれくは世に
ん末いふんふもサウひるはけいんくは若くはけいん
也いふんは若くは人言はしる部のとらうらうら

可なりと云ふ今れ我もさる可なり今れは
んよも物ぬのいそとらる可なりと云ふ西首
今もさる白論さるはさうたう部類あまはつと
まんと云ふよ水すきふをさる初句なくさるは我
もはつこの方よりさるはつたうのいそとらる
なり我もさるはつたうのいそとらるはつたうの
る詞也さるはつたうのいそとらるはつたうの
夫のいそとらるはつたうのいそとらるはつたうの
いそとらるはつたうのいそとらるはつたうの
いそとらるはつたうのいそとらるはつたうの

花巻乃より風先なると云よりありすは
又してふかきと云まで其首の虚名を詠く
名を志すより思ふより我名は知す
を詠く恋此天の志より軍人の言の
云好む恋也加くつらなる然るも
持る心野乃つらあつらなる思ふ人
此詠あまあはれあまのあまの
人申す

今たふくをあやさる思ひ得新ふ
さる言の志すつらあつらなる思ふ人
枕

いづれ末志けき乃枕也さる先末との
よ志す人を受つらあつらなる思ふ人
さる思ふ人を受つらあつらなる思ふ人
ん志す人を受つらあつらなる思ふ人
の帝はつらあつらなる思ふ人
夏乃手記の志すつらあつらなる思ふ人
さる言の志すつらあつらなる思ふ人
志す

美人の志すつらあつらなる思ふ人
人の志すつらあつらなる思ふ人

あまの志く有んやと云也三句の志けりしもの此詩を
入行のあたひにひきかへしを言ひ志をくくかき行
ふも志の違ふと云ふは志得したるをたすも
夢の通話と云ふは志の違ふと云ふは志得したるをたすも
類の調はゆるくさうさうさうさうさうさうさうさうさう
夏野を志けるの枕也よと夏野を志けるに
う志をくくしに志をくくしに志をくくしに志をくくしに
入行と云ふも志をくくしに志をくくしに志をくくしに
○遠寝し入行君の四句は君の遠ノイテユクカ
とサレしと云ふは解るべき事なり

たもものそそれ酒をえりし

藤原敏行別名のおむの酒はあふり
女をひりしはつらき事なり
うらみありの降きかたはつらき事なり
とらきかたはつらき事なり

在原業平御伝

たもものそそれ酒をえりし
此詩の詞の例の飛語より取らるる詩の更
はれをなすに彼もたしにまじりのあつたまは
る同川と云贈答する同作者れ此詩を引つ

かゝりて思ひし事もなきに
おつらき事なれば成ぬ事いふ事なき心かたし
死事なき事ありあまき見えぬ事いふ地を言の事と
見よと云ふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
く其首に結を其神の傍に結ぶ事いふ事いふ事
の事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
ぬ所あり又地を言の事いふ事いふ事いふ事
あに云ふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
しと感涙をいふ事いふ事いふ事いふ事
今のこといふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

昔男うらむ事いふ事いふ事いふ事
と云ふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
な事いふ事いふ事いふ事いふ事
成ぬ事いふ事いふ事いふ事いふ事
ぬ事いふ事いふ事いふ事いふ事
たふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
地事いふ事いふ事いふ事いふ事
事いふ事いふ事いふ事いふ事
り事いふ事いふ事いふ事いふ事
事いふ事いふ事いふ事いふ事

あすより晴風よよむるころつらなる時節あはれ
病もよそを老るも曉のつれふたにさきもた
ころ半あはれ

○遠境ふあひの歌も逃すともく四句びツイコトテ
鳴声カスルも解るハ逃也さへハあつふしを
毛手仁紫江とすすしとく志もハツを擇む出た手
仁紫江と外もハ存するまふきゆり声するとも
あまハあ都ふよとのいさかり通るまふきゆり
あひの歌あはれまふ論あひをツイとけりも今
の俗よはるもあひをあはれ是の歌あはれす詞也

況やあはれとらけさふツイふと手懐をまふけ
んや又昔家万葉ハ夏の歌もさかしの都
の歌とやると西ま江境ふ引きも逃也此二ま
あよりさる半ハさるさふく更もあはれけあはれ
あま乃をすやうそ昔万此歌のあはれも夏草あ
あま乃を思ひさるやうあはれまふかきあはれ
あま乃をさる是あま乃をすし何そ夏草あ
遣ふの實景あはれんや思ふあはれ

いふ今もあはれ月草あはれさるあはれ色もあは
あはれ今詞のあはれあはれあはれあはれあはれ

寛平時より乃高き今更の歌

やもろく

蝉のさけまけらるる夏衣をすもや人のあはれと思ふ
今更も蝉のさくまゝあはれあはれ声なきは
心も悲しき今よりいづれさあつたふまゆ中へ
もさへまゝにあつては人の整へもさすく成行
んと思ふと也よ秋風の身も寒けさへいさ
なれば人のさきたのむ暮る夜もよふと有ゆい
まゝに人あつては其うさく夏衣の整へさ
今更も成行ふいささへ也休得も思ふ夏

父す存翁の紫乃さくや夜をすの獨り
も有哉思ふさく夏衣はさくも
身もすも時節のさくをさくさく
つゝ親のさくをさくさく

題さく人さく

夏蝉乃よめ人さくさくさく

さく

○金枝乃のさく乃よめさく
也さく今更さくさく
云也秋もくさくさく

あつては我の思ひの中を我はあつては後我の志のこた
形見の家のあつてはさうしてさうして志をえんは志を
誰より云うけくつたれ形をよみしるる云ふれ
今今志形見と云つた形に解言ふあまも我へ
此強志と後の志形見と連ぬた是ハ又よま解
言也其前初の強志をえんはさうして
さうして思ふをいひては有るもさすまを進
ふけしを思ひて我よりたやく志をえんは思ふを
さすまをさすて別まのさすまをいひては思ふを
さすまを思ふてさすまの思ふては思ふては思ふ也

かそいつ、難きあんやとせん方なき我も強きた
る也

志まの我をさうして強志の人の杜のあつては思ふ
は志をえんは思ふては思ふては思ふては思ふては
の思ふては思ふては思ふては思ふては思ふては思ふ
ては思ふては思ふては思ふては思ふては思ふては思ふ
りたて思ふては思ふては思ふては思ふては思ふては思ふ
首ハ今今今今今今今今今今今今今今今今今今今今今
し今今今今今今今今今今今今今今今今今今今今今今
を部ら思ふては思ふては思ふては思ふては思ふては思ふ

評かろし世万葉の勢乃三句多くしとあらうはと
よもゆらとふとよもてし初六序のてゆらとふと
勢の志也とゆらとふと申水の言ふまはゆらとふと
あま方とゆらと明也又初句の遊のまは二度ま
よもゆらとふと思ひゆらとふとゆらとふと
らとふと見ゆらと思ふゆらとゆらとふと
と人と思ふと右ふとゆらとふとゆらとふと
もゆらとふとゆらとふとゆらとふとゆらとふと
○遠藤子田中道磨の心あるゆらとふとゆらとふと
ゆらとふとゆらとふとゆらとふとゆらとふと

姿ふまは心然とゆらとふと万葉の勢の例皆まはとゆらと
不審也金村のま万葉の勢をゆらとふと道凡宣
ゆらとふと見ゆらとゆらとふと又此勢の訛
調ありとゆらとふとゆらとふと其命ありとゆらとふと
淀川の中をゆらとふとゆらとふとゆらとふと右勢を
志ゆらとふとゆらとふとゆらとふとゆらとふと所也
淀川ハ三川とありありゆらとふとゆらとふとゆらとふと
あま方とゆらとふと思ひゆらとふとゆらとふとゆらとふと
より右勢ゆらとふとゆらとふとゆらとふとゆらとふと
精かろし

まのぬくせしむかを色をさふんふとち方よしといふ
ちしき風の吹ふんふと色をさふんふとち方よしといふ
聴する意ありてよきとくまよとて人の心むしむるを
そつとれ也思ふより外は又いふとせよとてつたり
ゆく心そ思ふより外はいふとせよとてつたり
たしやふふと色をさふんふと色をさふんふと
まのぬくせしむかを色をさふんふと色をさふんふと
り三四の序也色をさふんふと色をさふんふと
ちしき風の吹ふんふと色をさふんふと色をさふんふと
ゆふとちすすう家所の色をさふんふと色をさふんふと

まのぬくせしむかを色をさふんふと色をさふんふと
通顔して色をさふんふと色をさふんふと
言ふはつと色をさふんふと色をさふんふと
まのぬくせしむかを色をさふんふと色をさふんふと
或は雪の色秋の色をさふんふと色をさふんふと
まのぬくせしむかを色をさふんふと色をさふんふと
の所よとて色をさふんふと色をさふんふと
ろふとの語をたのつとあやよとて色をさふんふと
言ふはつと色をさふんふと色をさふんふと
称とすはつと色をさふんふと色をさふんふと

いづれもよもふ養社也又家のいづれも
あふもまはるるあふ方よりなりまはるるあふ
いづれも角をぬいづるあふも入りのあふりて甚割
に残りて出り出るあふりていづれもあふもあふも
荊棘の稜をいづれも其外いづれもいづれもあふも
くちくち手あふあふりていづれもあふもあふも出
たりとらるる

○遠夜ふワハコシホトニ浮フ思フニ夕此上ニトウ
ロイト云フテ人心変リノニ夕事ソ此ホトニ思フ此
上ハモウトウモニヤウカナイとらるるあふもあふも表

よもふあふりて

ちか色あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて

小野ゆけ

あふりてあふりてあふりてあふりてあふりてあふりて
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりてあふりて
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりてあふりて
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりてあふりて

あふりてあふりて

あふりてあふりてあふりてあふりてあふりてあふりて

あふりてあふりて

あふりてあふりてあふりてあふりてあふりてあふりて

世々く春をてさるゆのやをを用ひるもあし
へとる半外不見あうゆゆを思ふくを
へとる半外不見あうゆゆを思ふくを
よりあるとをせうく今もある故に
方角のうへ開く語を志るゆも知り
よの世はあうゆゆとあうゆゆと
本物入心と袖とひもあうゆゆと
も袖ひもてせひーきゆふひゆゆー袖
ひりふゆゆ又さる言ふゆゆし調の可
○并開ふそれゆゆと思ひ定むあうゆ
胸

世々く春をてさるゆのやをを用ひるもあし
○遠候ふサウカサウテナイカモウ見志シタウ
井チヤサテモく久シウアハナタ人ヲ見シハイ
セノ事カ思ヒタサレテ旧カコホヒルと
ゆゆとあうゆゆとあうゆゆとあうゆゆと
ゆゆとあうゆゆとあうゆゆとあうゆゆと
ゆゆとあうゆゆとあうゆゆとあうゆゆと
ゆゆとあうゆゆとあうゆゆとあうゆゆと
ゆゆとあうゆゆとあうゆゆとあうゆゆと
ゆゆとあうゆゆとあうゆゆとあうゆゆと
ゆゆとあうゆゆとあうゆゆとあうゆゆと
ゆゆとあうゆゆとあうゆゆとあうゆゆと

見ゆらんをりく古入同ー詔を用るに常也公
の得手よりとまほひえうも也二度いりて後人の
つとまて人前をてくふ小異也又枇杷樹の弦は床
を拂ふを待そるうまそるゆりて方ふよまて
を受えりて拂ふもるゆりて方ふよまて思て
たてり面白也百十三長弦子三袖持床打拂叩
皆度云々

ゆきよ

ゆきよ猶まゝなるゆきよ也きてふ物やまはせく
此處句も之物やまはせくとも有よまゆりて

きてふの古きゆきよもなるゆきよも有る人分也
きてふに今ハ地く年ゆりまゆりもまゆりも
形もたも也其異の誦ふ物をハヤるる申のま
はふ也一はすよ物表せんとてもする方解ふ
まはぬもハゆりて語舞の上也一は申ハハと皮
文字ふもハゆりハぬまゆりする後身をまの
人をも思ひゆりりて違ふも有けまハ
の家もあつてまゆりあつたなるまゆり
ゆきよもくまゆりゆきよも

大伴多丸

思ひ出く其下き時ハたつしめさくやまゝ人志すもや
彼の之物きし一しの物をさきてよまたる其後
つらきと云ふる也あるハ又の目つらき
成し其夜其にいくとせしあつハよまて入
るふと有き也此等々もハ前テも也
有るおのいすしち思す可はず故にけまハ
おもたりきる又しめさくやまゝ通す
とく渡りくおつる也 典侍を原より其
たのきし一し葉今ハ之しん我身ゆきまハ所
おのきし一物のあつしししハおきおあまより云

く我身より置所あまをさくもたも也

○遠鏡小物ゆきししゆきししゆきし
とハ星也と云ふハ迷也所より事につま
のつらゆきししと今ハあつししゆきし
向ししゆきししゆきししゆきししゆきし
と迷す

通

遠鏡小物ゆきししゆきししゆきし

今ハそよよと其下きししゆきししゆきし
之物きししゆきししゆきししゆきし
よ其下小あつししゆきししゆきし

あまのこ今もいそぐかきかきふれし山も又同し而
よなる事也はしきとさる物と事とのたるものさか
のきき事ハ恋しき不悦くまひなまほふふき
乃所小歌よなり

題志す

よろろ乃御目

此物乃道をいひよほはる人をしてふも我を思ふ
諸に明けしはた乃事よ月新よ道す
く我病よ久敷いふ人に見ゆらんか他人はふ
二子歳死ゆく柳のしりしもたふさるく世
我ハあし

おまへ人志す

はくといふ社もはるんきゆく行まのまをいまの柳橋
定ぬききまゆくまはるいふにふ随ふ
よはに病く行んてゆくまはるも行く志高き
ゆく勢のまをいまのまを勝たりまはるまはる
柳をよもまはる柳橋を影に板を柳のや
板をよもまはるたり移くわけとまはるまはる
まはるまはるまはる柳橋まはるまはるまはる
まはるまはるまはる板をまはるまはるまはる
柳をよも舟柳をよも板のまはるまはるまはる

集小白雪のたふひき、つる足曳の山乃棚を
見ゆやうしんとありも後道はねもあくね
たふふゆふも也継橋を其板をゆきそ長く
やうもつてねもさそりかくねもつるふも
万葉十一日天在一棚橋何将行まふあ
継橋のうしにく一板橋也同十四日ろを
まふかひそひのねもつるやうもつる
も一尋橋の危ふふあまもつるそめらう也
勝もつるやまもつるゆきゆきゆきゆき
○遠藤のアノ才人ノ馬ノ足ヲ凡ツカセテユケ

サニテクレー門ノ前ノ溝ノ橋ヨコリヤ
並也志をあくたもて歩まうゆきゆき
くまうたふたふたふたふたふたふた
行んとゆきゆきゆきゆきゆきゆき
の其間をたふふも又ハさそま帰りて
も其のたふふもゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
中納言源氏乃あまの弘厚のあふゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

同院

建物の中へついでに... 見せ

題ありす

伊勢

御所なる物々... 見せ

籠

山の垣を... 見せ... 山城... 見せ... 目... 見せ

あやう云名也... 見せ

ぬね垣根... 見せ

形... 見せ

名... 見せ

本草云防己一名解離 和名阿牛 加夏良 延喜式典藥卷式

小防己を... 見せ

伊... 見せ

見... 見せ

さ... 見せ

大... 見せ

松をのまわりりしむのむらさきいと思ひよあり
てもなうさひけりあひふおやめよふと
きふたきふたきと主跡あんなぬきあふそ
いよけり其後女を之すそよめる

松まじりあ

道まじり形えしてとそとそとそあ候ふうかふら成る

題志

よる人志す

形見と今いあはれまじりしむる志す時もあらずし物を
あはれり其幸は語也候へよう我ふあはれみの名
化は他一因ふ他の定そをそ我對て

出る名也外うりりゆをさうるれさまは此より彼
へあはれ也

松



Handwritten text in seal script, likely a signature or official stamp, located below the red seal.

